

信じるなら神の栄光を見る

ヨハネの福音書 11 章 38-44 節

はじめに

ヨハネの福音書 11 章には、病気で死んだラザロという人を、イエス様がよみがえらせるという奇跡が書かれています。イエス様は、「心に憤りを覚えながら」、ラザロが葬られた「墓」まで来られました。イエス様は、ラザロとその姉妹であるマルタとマリアを愛しておられました。彼らとイエス様は、特別に親しい関係でした。そのような親しく、愛する人の死を目の前にして、イエス様は、人間に死をもたらず悪魔と罪の力に対して、非常に強い怒りを覚えられたのです。

1. マルタとイエス

当時の墓は、洞窟になっていて、その入口は大きな石でふさがれていたのです。土葬のように土に埋めるのではなく、火葬のように火で焼くのではなく、遺体の手と足を長い布で巻き、顔を布で包み、そのまま洞窟に安置したのです。入口を大きな石でふさぐのは、遺体が動物に食べられたり、誰かに盗まれたりしないためです。もう一つは、遺体が腐っていくので、その臭いが外に漏れないように、墓の中に閉じ込めておくためです。

イエス様は、ラザロの墓に来られると、「その石を取りのけなさい」と言われます。イエス様は、墓をふさいでいた入口の大きな石を取りのけるようにと言われるのです。しかし姉のマルタは、これに抵抗を覚えてこう言います。「主よ、もう臭くなっています。四日になりますから」。イエス様が、ラザロの墓に来られた時は、ラザロが死んですでに四日経っていました。ドライアイスもないユダヤの地で、遺体が洞穴で四日も放置されていたら、腐敗も始まり、臭いも出始めていたのでしょう。姉のマルタは、自分の愛する弟の腐敗した臭いなど嗅ぎたくなかったのでしょう。当然のことです。

しかしイエス様は、マルタにこう言います。「**信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか**」。マルタはこの時、信じていませんでした。何を信じていなかったかという、ラザロが「今」「ここで」よみがえるということ、です。

11 章の始めから見ると、イエス様はラザロが死ぬ前、まだ病気の時、こう言われました。「**この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります**」(11:4)。イエス様は、ラザロの病気は「死で終わるものではない」と言われました。つまり「死んで終わり」、あるいは「ただ死ぬための病気」ではなく、「神の栄光が現れるための病気」だと言われるのです。ラザロの病気を通して、「神の栄光が現れる」と言われるのです。

「神の栄光」とは何でしょうか。「栄光」とは、ギリシヤ語では「ドクサ」という言葉ですが、「輝き」という意味があります。日本語の「栄光」という言葉にも、「光」という字が使われています。ラザロの病気を通して、あるいはラザロの死を通して、「神様が輝きを放つ」あるいは「イエス様が輝きを放つ」というのです。

今日の聖書箇所に至るまでに、イエス様と姉のマルタは、いくつかの対話を重ねてきました。マルタは、イエス様を信じていました。マルタは、11：22でイエス様にこう言います。「**あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています**」。マルタは、イエス様と神様は特別な関係にあること、イエス様が神様に求めれば、何でも与えられる、そういう特別な関係にあることを信じていました。また11：27では、「**私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております**」と言っています。マルタは、イエス様が神の子キリストであると信じているのです。その意味で、マルタは、今で言うと「クリスチャン」だと言えます。さらにマルタは、11：24でこう言います。「**終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています**」。マルタは、ラザロが「終わりの日」によみがえることも信じていました。

しかしマルタは、ラザロが「今」「ここで」よみがえるということは、信じていなかったのです。イエス様はマルタに、「**あなたの兄弟はよみがえります**」(11:23)と言われました。また「**わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか**」(11:25-26)と言われました。それに対してマルタは、「はい。主よ。・・・信じております」と言いますが、マルタが信じていたのは、イエス様が神の子キリストであるということで、ラザロが「今」「ここで」よみがえるということではなかったのです。

クリスチャンの人は、確かにイエス様を信じています。イエス様を神の子キリストであると信じています。自分の罪の身代わりに十字架で死なれた救い主であると信じていると思います。しかし、自分が抱えている具体的な問題についてはどうでしょうか。病気や家族の問題、経済的な問題については、どうでしょうか。そういう具体的な問題にも、イエス様への信仰を働かせているでしょうか。自分の救いに関しては、イエス様への信仰を働かせているけれど、自分が抱えている日常の具体的な問題に関しては、意外と現実的で、信仰が死んでいるということはないでしょうか。マルタも、イエス様を神の子キリストであると信じていました。しかし、愛する弟のラザロの死という問題には、信仰は役に立たない、ただ諦めるほかないと思ったのではないのでしょうか。

イエス様はマルタに、「信じるなら、神の栄光を見る」と言われました。ここでの「見る」という言葉は、「経験する」「体験する」という意味を持つ言葉です。「あなたがもし信じるなら、神の輝きを経験する」と言われるのです。多くの人は、「神の輝きを体験したら、信じる」と言います。祈りが聞かれたら信じる、奇跡が起きたら信じると言います。しかしイエス様は、その逆を言います。信じるなら祈りが聞かれる、信じるなら奇跡が起きると。「神の輝き」は、信じた人にしか経験できないものです。

「信仰」とは何でしょうか。ヘブル 11：1 には、こうあります。「**信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです**」。目に見えるものを信じることは、信仰ではありません。保証されているものを信じることも、信仰ではありません。目に見えないもの、何の保証もないものを信じるのが「信仰」です。ただ神様に信頼して、先も見えず、何の保証もない道に、勇気をもって一歩を踏み出していくことが信仰です。今日の聖書箇所と言うなら、イエス様を信じて、勇気をもって、大きな石を取りのけていくことです。私たちの心の中にある不信仰という大きな石を取りのけていくことです。

「信仰」という時、旧約聖書に出てくる一人のやもめの物語を思い出します。このやもめには、息子が一人いましたが、非常に貧しく食べる物にも困っていました。残りの食べ物は、一握りの粉と、ほんの少しの油だけです。彼女は最後にそれを調理して、それを食べて死のうとしていたのです。しかし、最後の調理のために薪を集めている時、預言者エリヤに出会うのです。エリヤは彼女に「一口のパンを持ってきてください」と言うのです。しかし彼女は事情を説明して、「あなたにあげるパンはない」と言うのです。しかしエリヤはそれでも、「まず私のためにパンを作りなさい。そうすれば、あなたの粉は尽きず、その油はなくなる」と言うのです。彼女がエリヤの言葉を信じて、その通りに行くと、エリヤの言葉の通り、彼女の家の粉は尽きず、油もなくなり、長い間、彼女と息子はそれを食べて暮らすことができたのです。

私たちは、信じるなら神の輝きを経験するのです。旧約聖書のハバクク 2：4 には、「**正しい人はその信仰によって生きる**」とあります。信仰によって生きていくのが、クリスチャンです。クリスチャンになる時だけ信仰を持つのではなく、クリスチャンになってからも、日常の中で起きてくる様々な問題にも、信仰を働かせて生きていくのが本当のクリスチャンです。ヘブル 11：6 には、「**信仰がなければ、神に喜ばれることはできません**」とあります。私たちは、日常の様々な問題にも信仰を働かせて、神様の輝き、イエス様の輝きを経験していくのです。病気や家族の問題、経済的な問題にも、です。神様の輝き、イエス様の輝きを経験していけばいくほど、私たちの信仰は確かなものとなっていくのです。

キリスト教というのは、確かに道徳も語りますが、決して道徳だけの宗教ではありません。聖書を学び、お祈りをし、礼拝に通い、献金をし、奉仕をし、伝道をすれば、それでよいではありません。キリスト教の信仰というのは、本来、非常にダイナミックなものはずです。目に見える現実にたとえ希望が持てなくても、信仰の目を開く時に、勇気をもって一歩を踏み出していける、それがキリスト教の信仰だと思います。

おわりに

イエス様は、「信じるなら、神の栄光を見る」と言われます。そのために、「その石を取りのけなさい」と言われます。私たちは、心の石を取りのけなければなりません。信じることを邪魔している、あるいは信仰を塞いでしまっている心の石を取りのけなければなりません。その石を取りのける時、私たちは神様の輝きを経験するのではないのでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの信仰は、生きているでしょうか。それとも墓の中に眠っているでしょうか。せっかくイエス様を信じてクリスチャンとして歩み始めたのに、目に見える現実の中だけで生き、道徳的な生き方に終始してしまっているのかもしれない。

どうか私たちの信仰の目を開き、今も生きている神様の輝きを経験させてください。望みえない時に、信仰の目を開いて、希望を持つことができますように。何の保証もない茨の道であったとしても、神様の御心であれば、一歩を踏み出す勇気を与えてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。